



コミコミスク

明石のコミュニティ・スクール

未来にむけて 学びをかえる

未来を創り 社会を支える 新たな学びと育ちのシステムづくり

KomiKomiSukuSuku

明石市教育委員会事務局学校教育課 mail: gakkyo@city.akashi.lg.jp

For The Future

No. 153

2022

3.9

第5回みんなでラボろう

松が丘小学校 勝手に研究発表会



3月4日（金）に“第5回みんなでラボろう～松が丘小学校勝手に研究発表会～”が開催されました。各学年が今年度地域と連携しながら創り上げてきた活動を各学年のカリキュラムマップとともに紹介していただきながら、松が丘小学校が今考えているカリキュラムマネジメントについて説明していただきました。

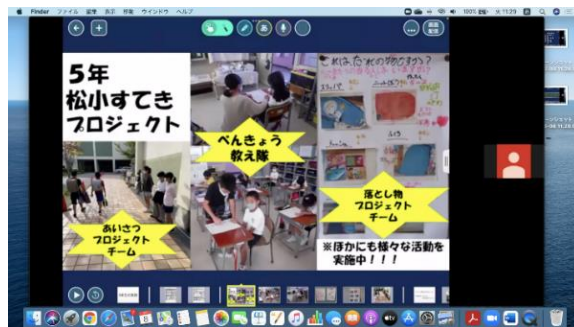
松が丘小学校の今年度の研究テーマは“「ありがとう」でつながる学校・地域とは…”と設定し、地域の中で（社会の中で）生きる子どもが主人公の、入学から卒業までの成長のストーリーとして取組んでこられています。その入学から卒業までの成長のストーリーを演出しているのが松が丘小学校のカリキュラムマネジメントのように思えてきました。それをより分かりやすくあらすじ的に見える化したものが各学年の「カリキュラムマップ」ということが話を聞く中で見えてきました。入学してから卒業するまでの成長を、“「ありがとう」と言う存在から「ありがとう」と言われる存在へ”と具体的な成長の姿をイメージしやすくするために、各学年を次のようなステージとして考えられています。

- 1年生：愛されるステージ
- 2年生：気付くステージ
- 3年生：環境という視点から学校づくりに参画するステージ
- 4年生：福祉という視点で、地域とつながるステージ
- 5年生：学校づくりに参画するステージ
- 6年生：地域づくりに挑戦するステージ

各学年はこうしたステージという成長の姿をイメージし、教科学習も絡め「カリキュラムマップ」を一度作成し、実践をすすめていけます。そして夏休みの学年戦略会議で1学期の実践の中での子どもの様子から、2学期・3学期を見通し最終的なゴールをより具体的にし、それに向かってカリキュラムマップに修正を加えていきます。そのカリキュラムマップをもとに、学年のゴールを、そして次の学年のステージにつながるようにバトンを渡していく流れを各学年の取組を聞く中で具体的にイメージすることができました。こうした流れが学年の中で、学年を超えてのPDCAサイクルなんだなと話を聞きながら理解することができました。ラボろうに参加された方から、「松が丘小は全部つながっている」といった感想を聞かせていただきました。確かにいろいろなことがつながってきているのが松が丘小の実践であり、それがPDCAがうまく機能しているという現われなんだと考えます。

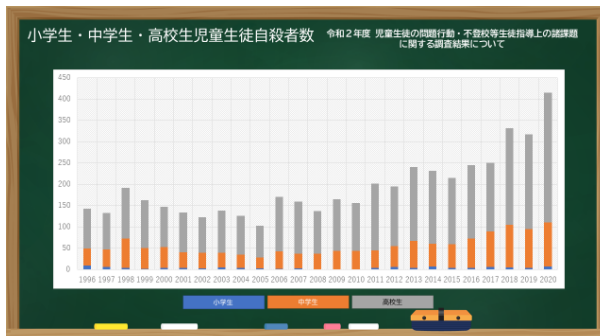
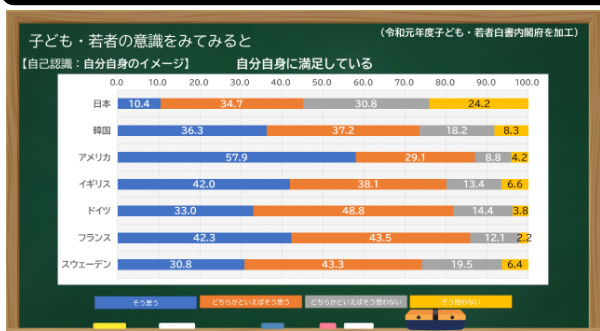


松が丘の取組みの特徴として、どの学年も“子どもたちが考えたことを行動に移す”というところだと考えます。“調べて・まとめて・発表”というパターンが多いですが、松が丘小はそこからスタートなんだと考えます。5年生の「松小すてきプロジェクト」でも自分たちが調べて、話し合っただけで考えたことを実際に動かしていきます。実際に動く中で学んだことが、6年生の地域の中でおこなう松が丘プロジェクトにつながっていくことが話を聞く中で良く理解できました。全学年の取組みを聞く中で、教師がPDCAをまわしているのと同じように、子どもたちもPDCAをまわしていることが見えてきました。この子どもたちがPDCAをまわすという力が未来を生きる子どもたちには必要だと今回の“松が丘小学校 勝手に研究発表会”で学べたように思います。



今回の“松が丘小学校 勝手に研究発表会”での話を聞きながら、研究が変わっていかねばいけないのではと感じました。授業研究の中での「発問」や「板書」といった授業技術の向上も大切だと思います。未来を見すえた学びのあり方が問われている今、未来を生きる子どもに必要な資質・能力をしっかりと見つめ、その資質・能力が育つフレームをデザインすることが求められているのではないのでしょうか。

未来を生きる子どもたちに必要な資質・能力を考えてみるにあたって



未来を生きる子どもたちに必要な資質・能力を考えるにあたって、日本の子ども・若者の意識等を見てもみるのはいかがでしょうか。私自身、コミュニティ・スクールの研修コンテンツづくりを始めるにあたり「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度）」（内閣府）等を見ながら、「どんな資質・能力が必要なんだろう、そのためには」といったことを考えたりしています。

新年度の研究を考えるにあたりこうした資料を参考にしながらまず校内で対話を始めてみるのはいかがでしょうか。学びのフレームに目を向け、そのフレームをデザインしていく中で、これまでと違った景色が見えてくるのではと思います。

いろいろな考えがあると思いますが、「未来を生きる子どもたちに必要な資質・能力」を教職員だけでなく、保護者・地域の方と一緒に考えていくことが必要ということ間違いはないと思います。

(文責：北本)